

佐土原キリスト教会・2022年2月6日・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書3章20～30節

説教題：強い人より強い方

しばらく前の「百万人の福音」は、悪魔(サタン)を特集していました。面白い悪魔の格言もありました。「いつまでもあると思えよ。この世と命」。悪魔が私達にそう思わせて、天国に備えることを怠らせようとするのです。私と悪魔、悪霊との出会いは、千葉の神学校で学んでいる時のことでした。宣教学の授業の中で悪霊の話になりました。その頃の私には、悪霊は遠い存在でしたし、一部の特別の人が語っていることだと思っていました。ところが、「博士号(ドクター)」を持つ先生が、「悪霊の働きはあるよ。悪霊の働きで色々なことが起こっているよ」とさらりと言われました。その先生の言葉で、私には悪霊の存在が現実的なものになりました。悪霊というと、何か空想の世界のような、現実味のないものを感じられるかも知れませんが、そうではありません。悪霊は人間が創造される遙か以前に墮落した天使です。サタンと言う大天使に従って一緒に墮落した天使達が悪霊です。サタンの働き、悪霊の働きは、今も現実です。私は(いわゆる)自然悪というものを考える時、そこにサタンの働き、悪霊の働きを思います。悪霊は、人々の心を必死になって神から引き離そうとします。「神がいるならどうして…」と思わせようとしています。しかし神様の働きは、それを遙かに越えものであることを覚えたいと思います。「創世記50章20節」に「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました」(創世記50:20)とあります。悪霊は、人に働きかけて悪をさせるかも知れませんが、しかし神は、それさえも良いことの計らいとして下さるのです。それが私達の希望です。

今日の箇所は、サタン、悪霊について教える箇所です。「内容」と「適用」と、2つに分けてお話しします。

1:内容～サタンを縛り上げる主

20節に「イエスが家に戻られると」(20)とあります。この家は、おそらくイエス様の伝道の拠点、カペナウムにあったシモン・ペテロの家です。イエス様はそこでペテロの姑を癒されました。それ以来、ペテロの家族は、家庭をイエス様に開放して、イエス様はここを新しい家と定めておられたようです。そこに群衆が詰め掛けて来て、イエス様も、イエス様の助け手として活動するようになった弟子達も、食事をする暇もないほど忙しい思いをしていました。そこに2つのグループの人々がやって来ます。「イエス様の身内の者たち(家族と親類)」、そして「エルサレムから下って来た律法学者たち」です。この2つのグループは、2つとも、イエス様に対する見方、接し方を間違っているのです。

「身内の者たち」は、イエス様を連れ戻しにやって来るのです。なぜなら、イエス様について「気が狂ったのだ」という噂をする者達がいて、その噂がナザレの家族の許にも聞こえて来たのでしょう。彼らには、非常な事態から普通の生活を取り戻させてやりたいという、彼らなりの愛情があったかも知れません。しかしそれだけではなく、「新共同訳」は「取り押さえに来た」(21)と訳していますから、親類一同の評判に関わる、飛び上がったことをしてもらって迷惑している、そんな思いもあったかも知れません。いずれにしても、イエス様を自分達の手の中に置いておこうとしたのです。イエス様をそのような存在として考えたのです。ナザレで30年間の生活されていた時はともかく、イエス様は伝道に立たれて以来、神の子、神の救い主として、神の業を行い、人々を神との交わりに引き入れる、そのために十字架に向かいながら、働きをしておられたのです。家族の理解しているイエス様を遙かに超える大きな方として存在しておられたのです。彼らは、そのことが分かっていたにもかかわらず。

私はここから教えられるのです。私達もイエス様を、小さく、小さく、考えてしまう面があるのではないのでしょうか。そのことについて、さらに教えてくれるのが、2つ目のグループ、律法学者達のイエス様への理解と、それに対するイエス様の応答です。

律法学者達は、身内の者達とは違い、明らかな敵意をもってイエス様を攻撃して来ました。エルサ

レムの最高議会(サンヘドリン)は、ガリラヤで評判になっているイエスを探らせるために律法学者を派遣していました。彼らの務めは、「イエスの活動が容認できるかどうか」を見極めることです。しかし事の重大さを見てでしょうか、イエスへの攻撃を始めるのです。イエス様は、悪霊に憑かれた者から悪霊を追い出しておられました。当時、「悪霊払い」は広く行なわれていました。干した木の根や、動物の肝臓や、色々なものを用いてやっていたらしいです。しかしイエス様の場合は、権威を持って、間違いなく悪霊を追い出して行かれました。それに人々は驚き、歓迎していました。律法学者にしてみれば、安息日を守らないような者に人気が集まっては困るのです。そこで彼らがい出したのが 22 節「彼は、ベルゼブル(悪霊)に取りつかれている…悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」(22)ということでした。彼らは、信仰について良く知っているはずの専門家でした。彼らにすれば、その専門家である自分達に理解出来ないようなことをする者、しかも自分達の側に立っていない者、そういう者は「悪魔の虜になった者」に違いなかったのです。

それに対してイエスは応答されます。もし悪霊の力で悪霊を追い出しているとすれば、悪霊の世界に分裂があることとなります。それでイエスは言われます。「内輪もめをしていけば、その組織は立ち行かない。サタンだって身内が乱れていては困るだろう。だからサタンの内輪もめではない」。イエス様がおっしゃるように、どんな国でも社会でも、内輪もめをしていたら立ち行きません。内戦をしている国の状況は悲惨です。いずれにしても、内輪で争っているのは、どんな組織も社会も立ち行きません。だからイエスは「あなた達がいうように、サタンの力によって悪霊を追い出しているのではない」、そうではなくて「27 節」「強い人の家に押し入って家財を略奪するには、まずその強い人を縛り上げなければなりません」(27)と言われるのです。何を言っておられるかというところではなく、人々の心に巣くっている強い力(悪の力)を縛り上げ、心の家からその悪の力を追い払ってしまう真の支配者が来たのだ。私が入った心から悪霊を追い出しているのは、そういうことなのだ」と言われたのです。「私こそ人の心に真実の平和の支配をもたらす者なのだ」と言われたのです。

私は、昨年 3 月～6 月頃、鬱状態でした。息苦しく、落ち着きがなく、食欲もないのです。お医者さんに行っても分かったことですが、ある一定以上のストレスが精神にかかる、セロトニンという私達の気持ちを安定させ、幸いを感じさせるホルモンがストレスに負けてしまうようです。私は、気に病むことがあって、それがストレスになってしまったようです。そういう身体の中の変化もあったのですが、信仰的には、イエス様がサタンより強い、ということ信じられなくなっていたのが一番の原因でした。普通ではない精神状態の中で、サタンの働きが迫って来るように感じられたのです。しかしそんな時、聖書は「イエスは、サタンの働き、悪霊の働きよりも強い」ということを語ってくれました。

振り返って見れば、私達が神を信じる前、私達の心の中にも、神を信じさせないもの、「神なんかいない、いても自分には関係ない」という思いがあったのではないのでしょうか。私は、小学生の時、教会学校に通っていたのに、大学生になった頃、「自分はキリスト教とは関係のない人間なのだ」と思ったことを覚えています。そんな心の中に神が入って来て下さり、神に逆らうものを縛って放り出して下さったのです。皆様も、神様が、色々な形で、皆様の心にあった神に背を向けるもの、神を否定するもの、そのようなものを縛って、ご自分の許へ引き寄せて、ご自分のものとして下さったのではないのでしょうか。自分の力で、神様を信じる事ができる人はいないのです。イエス様が、私達の心に入って来て下さったのです。私は先日、虫垂炎で入院しましたが、その時、本当に祈られてある幸い、神の御手の中にある幸いを思いました。痛かったのですが、本当に平安でした。そして術後、どんどん癒されて行くのに驚きました。

私事を申し上げ恐縮でしたが、イエス様によって私も、神の祝福の中に置いて頂きました。皆様もそうでしょう。サタンは、私達の祝福が悔しいので、私達を何かと苦しめ、がっかりさせ、希望を失わせ、神から引き離そうとします。私自身はその中で怯えてしまいましたが、イエス様はサタンよりも強い、この個所はそのことをはっきりと教えます。イエス様はサタンより強い。またイエス

様は、身内の者達が考えたように、私達の理解の中に納まるような小さい方でもないのです。私達はイエス様の捉え方を間違えないようにしたいと思います。イエス様は、サタンさえ、悪霊さえ、縛り上げて仕舞われる方だということ、そのことを心に刻みたいと思います。

2:適用～主を真に覚える

この個所が私達にチャレンジすることが2つあります。

1)罪の赦しを本気で信じる

1つは、罪の赦しを本気で信じることです。28節「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます」(28)。イエス様は、ご自分の御力によってサタンを縛り上げるだけではないのです。サタンは「中傷する者」です。神の前で私達の罪をあげつらうのです。そして私達は、過去に色々なことを犯して今がありますから、無罪の主張が出来ないのです。(因みに、自らの罪を認めなかったのが律法学者達です)。私達が心を柔らかくして、素直に見つめれば、自分の歩いて来た道に罪を認めないわけにはいかないはずです。古島和徳という方の証を思います。それは酷い環境の中で育たれました。こんな厳しい人生があるのかと思うような人生、その中で一生懸命生きて来られました。しかし、その方が言われるのです。「(ある日)神が静かに語りかけて下さった。『あなたは父親の心の悲しみを理解しようとしたことがあるのか…その悲しみ、苦しみを考えたことがあるのか…死んだ姉にもなぜ優しくしなかったのか…』」。そんなに苦労して、頑張った人でも、自分の歩みを振り返る時、自分の中に罪を認めざるを得なかった、という証しに触れる時、私達は皆、過去に傷がある、ということを教えられるのです。

サタンは、私達に、私達の罪を思い出させ、「お前はこんなことをして来たではないか」と言って来るのです。「百万人の福音」にサタンのこんな格言がありました。「自らを赦さず、ずっと責め続け、赦しの恵みの、持ち腐れかな」。そして私達は、サタンの計略にはまってしまうのです。

しかしイエス様は、私達に攻撃を仕掛けて来るサタンを縛り上げて下さるだけではありません。「『私達の罪』となって」、その罪を十字架で処分して下さいなのです。だからこそ「人はその犯すどんな罪も赦していただけます」(28)と言って下さるのです。それを本気で信じることです。その時、福音が本当に力を発揮するのです。私達を新しく生かすのです。三浦綾子さんが次の勧めをしています。「自分自身に愛想のつきた人でも、そのままがいい。罪深いままでいい。聖書にあるとおり、キリストは我々罪人を救うためにこの世に来られたのだ。ああ、私が悪かった、おゆるしてくださいと言う人を、神は喜んで迎えようとしておられるのだ。だまされたと思って、あなたもイエス・キリストの神を信じてください。全く別の人生があなたの行く手に待っていることを、わたしは断言してはばからないのです」。神の赦しを本気で信じて、福音の力に生かされたいと思います。

2)主の深い御心を信じる

もう1つのチャレンジは、29節です。「しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます」(29)。律法学者達は、イエス様において働く聖霊の働き、神の恵みの働きを、無視しました。無視したどころか、それを「サタンの働きだ」と言って冒涇しました。ある神学者が言いました。「聖霊を汚すこの言葉も祈りになり得る」。聖霊は、イエス様において働き、私達に罪を教え、私達を悔い改めに導き、神の御手の中に導いて下さるのです。先の言葉は、聖霊の働きをバカにする、その言葉も「祈り」になって神の耳に届くということです。そのような祈りをしているなら、その通りになる。だから、神の恵みの働きが、その人にとっての恵みになることはないのです。救われないように祈っているのですから、救われようがないのです。聖霊の働きを受け取れない状況を、自分で作っているのです。それが「赦されない」ということです。

私はこの言葉から「私達も聖霊の働きを受け取りそこなうことがないように」、というチャレンジ

を受けます。聖霊は、私達にも色々な形で働いて下さいます。私達は、聖霊の働きをバカにしたり、聖霊を汚すようなことはないでしょう。しかし、神の深い御旨を考えずに、聖霊の働きを汚すことはあるのではないのでしょうか。

「昨年の一時期、鬱状態だった」と申し上げましたが、牧師をしていながら、神が恵み深い方であるということを見失い、随分と神様に文句を言い続けたのです。本当に恥ずかしいことです。しかし、教えられる証しに出会いました。この方は大阪で会社を経営しておられたクリスチャンの方です。裁判で、色々辛い思いをしている時に、阪神大震災が起きました。その中で5歳の息子さんを亡くされるのです。「祈ったのですが、だめでした」という言葉がありました。どんなにお辛かっただろうかと思うのです。私だったら「神様、なぜですか、なぜ子供を取られたのですか」と食って掛かると思うのです。その方も『何でこんなことが…』と思った」と言っておられます。しかしこの方は、後になって、信仰によって導かれて来たご生涯を思い、そこから感謝を紡ぎ出し、こんなことを言っておられるのです。「信仰を持つということは、どんな状況でも、自分には思わしくない状況に思える時にも、必ず背後で神様が事を行って下さっている、と考えられることでしょう。それが何でも、今の自分にとって最善のことを神様はして下さっている、と思えることが信仰でしょうし、今までを振り返ってみて、確かにそうだったと思えることは感謝なことです」(宮原寿夫)。私は、本当に励まされました。私達の信仰は、どんな時にも、神は私に最善をして下さっていると信じる信仰であり、それがまた、聖霊の良き働きを受け取ることのできる信仰なのだと思います。

終わりに

今日、2つのことを申し上げました。サタン、悪霊の働きは現実です。私達は、悪霊に勝つことはできません。しかしイエス様は、サタンより、悪霊より強い方です。であるからこそ、主に祈ることが大切です。羊が羊飼いによって安心して暮らして行けるように、私達も主によって、悪霊の働きがあっても、安心して暮らせるのです。そのためにイエス様は「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」(マタイ 6:13)という祈りを教えて下さいました。祈りの中で、私達の魂は十字架に導かれて行くのではないのでしょうか。そこに私達の立つところがあるのです。祈りつつ、祈りつつ、恵みの中を歩いて行きたいと願います。